

〈解題〉

本稿は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の論文 “*Ueber die männliche und weibliche Form*” の全訳である。原著は、シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) が編集主幹となって、コッタ社から創刊された雑誌『ホーレン』 (*Horen*) の第3巻80-103頁 (1795 3, 80-103)、第4巻14-40頁 (1795 4, 14-40) に掲載されたのが初出である。『ホーレン』は、1794年に刊行が決定し、6月にはフィヒテ、ゲーテ、フンボルト、ヴォルトマンが編集委員として迎えられた。カントにも協力を依頼している。これはシラーが『人間の美的教育について』の構想にさいして、カントの『判断力批判』の美学論から大きな示唆を得たことと関係している。『ホーレン』は、1795年1月から刊行が始まり1797年まで全3巻36冊が出版された。寄稿論文のなかには、ゲーテの第二書簡、「ローマ悲歌」「文学的サンキュロツティズム」「ドイツ人亡命者の談話」、シラーの「人間の美的教育について」、フィヒテの「真実に対する純粋な関心への活発化と増大に関して」などがある。フンボルトは1794年から1795年にかけて、性差に関する論文を二編書いている。第一論文「性差およびその有機的自然に及ぼす影響について」は『ホーレン』の第2号 (*Horen*, 1795 2, S. 99-132) に掲載された (杉田孝夫・菅野健訳 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編『ジェンダー研究』第16号, 2013年, 75-93頁所収)。本稿はそれに続く第二論文である。

フンボルトがなぜ性差論を書くに至ったのかその事情はかならずしも明らかではないが、すでにそれ以前に習作「ソクラテスとプラトンの神性、摂理、不死性について」 (*Sokrates und Platon über die Gottheit, über die vorsehung und Unsterblichkeit*, 1785. 1787), 「宗教について」 (*Über Religion*, 1789) を経て、「新しいフランス憲法に触発された国制考」 (*Ideen über Staatsverfassung, durch die neue französische Konstitution veranlasst*, 1791)、生前刊行されることなかった幻の名著「国家活動の範囲を規定するための試案」 (*Ideen zu einem Versuch die Grenzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen*, 1792) を書いた後、古代研究「古代、とりわけ古代ギリシアの研究について」 (*Über das Studium des Altertums und des griechischen insbesondere*, 1793) や人間形成に関する断片「人間の陶冶の理論」 (*Theorie der Bildung des Menschen. Bruchstück*, 1793) を書いている。またフンボルトは1789年12月16日にカロリーネ・フォン・ダッヘレーデンと婚約し、そのクリスマスに二人はヴァイマルのレンゲフェル姉妹の家の客となり、そこでレンゲフェルと妹の婚約者であるシラーと初めて対面することになり、シラーはそのあとすぐにフンボルトをイエーナの自宅に招き数日共に過ごしている。これがシラーに私淑することになるきっかけであった。ちなみにヴィルヘルムとカロリーネの二人は1791年7月29日に結婚している。こうした草稿執筆の経緯等を考慮すれば、おそらく人間形成あるいは陶冶に関する関心が前提にあって、シラーの影響のもとに、その問題枠組みのなかで両性の陶冶のあり方を比較考察する方向に向かったのであろう。そのことは「男性の形式と女性の形式について」のなかにもシラーの『人間の美的教育について』からの引用が散見されることから窺える。またヤコービの哲学小説『アルヴィル』や『ヴォルデマール』なども構想の背景にあったことは疑いない。ちなみにフンボルトは1794年には、『ヴォルデマール』の書評を『一般文芸新聞』 (*Allgemeine Literaturzeitung vom Jahre 1794*, 3, 801-807 (Nr. 315, 26, September). 809-816 (Nr. 316, 27, September). 817-821 (Nr. 317, 27, September) に発表している。二編の性差論を書いた後、フンボルトは「比較人類学の構想」 (1795年) を執筆する。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトについては、さしあたり亀山健吉『フンボルト 文人・政治家・言語学者』（中公新書525, 1978年）、吉永圭『リバタリアニズムの人間観 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに見るドイツ的教養の法哲学的展開』（風行社、2009年）、フレデリック・C・バイザー（杉田孝夫訳）『啓蒙・革命・ロマン主義 近代ドイツ政治思想の起源 1790-1800』（法政大学出版局、2010年）第5章「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの初期政治理論」（221頁-272頁）が参考になる。

本訳稿の訳出に際しては、プロイセン王立科学アカデミー版全集第1巻（Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften, Herausgegeben von der Königlich Prussischen Akademie der Wissenschaften, Band I. Erste Abteilung: Werke I. Berlin B. Behr's Verlag, 1903, Photomechanischer Nachdruck, Walter de Gruyter & Co. Berlin, 1968, S. 335-369）を底本とした。訳文の欄外の数字はアカデミー版全集第1巻の対応頁をさす。

なお原文で隔字体で強調されている部分は、訳出に際しては傍点を付した。本文中、イタリック表示のラテン語は、訳文においては訳語のあとに（ ）を付して原語をイタリックで表記した。テキストを理解する上で重要なキーワードには訳語のあとに（ ）を付して原語を示した。文中に頻出するdie Form, die Gestaltはそれぞれ「形式」「形態」と訳し、das weibliche, das männlicheは「女性的なもの」、
「男性的なもの」、die Weiblichkeit, die Männlichkeitは「女性性」、「男性性」と訳した。またBildungは、文意に応じて、「陶冶」「形成」「造形」と訳し分けた。[]内は訳の補いである。

（すぎた・たかお／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授）